

- 日 時：2020年4月19日（日）
- 場 所：立川教会
- 説教題「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」
- 説教者飯島 信 牧師
- 聖 書：旧約 出エジプト記 15：1-11（旧 p117）  
新約 ヨハネによる福音書 20：19-31（新 p210）
- 讃美歌 7「ほめたたえよ、力強き主を」529「主よ、わが身を」

お早うございます。

お元気ですか。

二度目の動画にもよるメッセージです。

一日も早くコロナウイルスの問題が収束し、再び皆様と御一緒に礼拝を守れる日が来ることを心から待ち望んでいます。

今日与えられた聖書の御言葉は、ヨハネによる福音書 20：19-31 節、死を打ち破り、甦られたイエス様が、弟子たちの前にその姿を現したことを私たちに知らせるものです。メッセージの主題である「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」との言葉は、12 使徒の一人である「ディディモ（双子）と呼ばれるトマス」にイエス様が語られた言葉です。しかし、この言葉は、今まさに私たちに向かってイエス様が語られています。「あなたは、復活を信じるか」と。そして、「あなたは、私を信じるか」と。

先週のイースターのメッセージで、私の心を深く捉えている出来事が、使徒信条にある「死にて葬られ、陰府に降り」の箇所であることを申しました。後で録画を確認したところ、「使徒信条」を唱和した時、私は「死にて葬られ」の前にある「十字架につけられ」を言わずにいたことに気が付きました。改めて、この場を借りてお詫び致します。

ところで、まさにこの一連の、「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に降り」と言う言葉にこそ、私たちのキリスト教信仰にとって、最も大切な問いかけがあります。それは、誰のための「十字架」であったのか、誰のために「死にて葬られ、陰府に降」られたのか、との問いかけです。私たちはそれに答えなければなりません。

今日の聖書の箇所を見てまいりましょう。

ヨハネによる福音書 20：19-31、新共同訳聖書では 210 頁です。

19 節からお読みします。

19：その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

イエス様が捕らえられ、十字架に架けられた時、弟子たちは皆散りじりになって逃げて行きました。しかし、その後、彼らは又集まって来て、ユダヤ人たちの搜索を恐れ、息をつめて身を隠していました。この日の朝、マグダラのマリアによって告げ知らされていたイエス様の甦り、即ち「わたしは主を見ました」との言葉は、彼らには何の力をも与えませんでした。「マリアは何を言っているのだろうか。復活など有り得るのだろうか」と。

そこに、イエス様が現れます。そして、言葉をかけるのです。「あなたがたに平和があるように」と。

私は、イエス様が弟子たちにその姿を現したこの場面に想いを寄せた時、私たちの人生は、ただ二つの事実に分けられているのを知られるのです。一方は不安と恐れであり、他方は安らぎと平和です。この時、弟子たちは、自分たちもイエス様の仲間としていつ捕らえられ、殺されるか分からないとの恐れの中の中にいました。その弟子たちにイエス様が投げかけた言葉は、「安かれ、あなたがたに平和があるように」です。「安かれ、あなたがたに平和があるように」。この言葉こそ、まさに、不安と恐怖の中にいる弟子たちが求めている言葉でした。弟子たちだけではありません。時代を越えて、今この時、私たちが求めている言葉でもあるのです。

「あなたがたに平和があるように」とのイエス様の言葉は、心から敬い、愛して止まなかったイエス様を失った弟子たちの心の暗闇の中、一筋の希望の光が差し込む言葉でした。そして、驚きの中にいる弟子たちに対し、イエス様は 20 節、

20a：そう言って、手とわき腹とをお見せになった。

十字架に釘打たれた手の跡と、兵士に槍で刺されたわき腹の跡です。弟子たちは、

20b：主を見て喜んだ。のです。

福音書記者ヨハネは、弟子たちと復活の主との再会の場面を、ひと言「主を見て喜んだ」とだけ記しました。しかし、私たちは、この再会が、どれだけの喜びを弟子たちにもたらしたかを想像するに難くありません。愛する者を失った後の心の虚しさを私たちは知っています。それは、何物をもってしても癒すことは出来ません。その愛が深ければ深かったほど、虚しさも又深いのです。弟子たちは、彼らの生きる希望であり、力であり、心から慕い、敬愛してやまなかったお方を失ったことによって、癒やし難い心の隙間を抱えていました。そこに、あのお方が甦り、姿を現して下さったのです。心の奥底から突き上げるような喜びが彼らを襲い、甦りの主との出会いによって、一瞬の内に虚しさは露のごとく消え去りました。二度とお会いすることもなく、二度とその声を聞くこともないと思っていたイエス様が、目の前にいる。どれほどの喜び、どれほどの感謝であったことでしょう。

しかし、その一方で、弟子たちの不安な思いが全て拭い去られたわけではありませんでした。イエス様との再会に心躍らせながらも、いつ自分たちが捕らえられるかも知れないとの不安です。そのことを知っているイエス様は、さらに弟子たちに語りかけます。

21 節です。

21：イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

喜びの中にも、不安と恐れを拭いきれない弟子たちに、イエス様は、心の内側に向いていた目を、新たな使命を与えることによって外に向けさせます。そして、この使命を担うために必要な唯一のもの、神様からの力を与えるのです。22、23 節です。

22：そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

23：だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

この「聖霊を受けなさい」と言う箇所は、私たちに大切なことを教えています。

それは、この時の弟子たちは、全く無力とされていることです。

弟子たちの中には、イエス様を、ローマ帝国の圧政からユダヤを解放する政治的指導者として期待していた者もありました。しかし、イエス様の十字架の死によって、その期待は微塵に打ち砕かれ、それどころか、弟子たちは、今や彼らの師と仰いだ者が十字架の極刑に処せられてしまった哀れむべき者たちと見做されていたのです。しかし、その時こそが、即ち、人間としての誇るべき物、頼るべき物が何も無くなったその時こそが、私たちは神様からの聖霊を受けるに相応（ふさわ）しい者となるのです。己の欲望に拠ってではなく、神様から与えられる聖霊によって、使命に立ち上がることが出来るのです。

24 節以下、トマスについて記されている箇所に入ります。

24：12 人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

25：そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

トマスのこの言葉は自然な言葉でした。マグダラのマリアが「わたしは主を見ました」と言った時、弟子の中の誰一人としてその言葉をまともに信じた者はいませんでした。トマス

も同じです。彼も又、他の弟子たちが何を言おうと、主イエス・キリストの甦りなど信じる  
ことが出来なかったのです。

それから8日の後です。イエス様が甦られた週の次の週のことでした。26節です。

26：さて8日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒だった。戸にはみな鍵が  
かけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と  
言われた。

復活のイエス様に会い、聖霊を吹きかけられた後でも、ユダヤ人たちに対する弟子たちの  
恐れは変わりませんでした。そして又、イエス様も、そのような弟子たちを叱ることをせず、  
三度平和を呼びかけます。

弟子たちの中に、トマスもいました。27節以下です。

27：それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。  
また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる  
者になりなさい。」

トマスにとって、甦りの主との初めての出会いでした。イエス様は、トマスの疑いを知っ  
ており、その疑いを晴らすことを言われます。指を当てて手の釘跡を確かめ、手を伸ばし、  
わき腹に触れてみよと言われます。しかし、福音書記者は、トマスがどうしたかを記すこと  
はなく、28節の言葉をだけ語らせています。

28：トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。

私は、トマスは、復活の主に出会った、もうそれだけで十分であったと思います。確かに  
自分はあるようなことを言った。しかし、主に出会った、もうそれだけで胸がいっぱいにな  
ったと思います。そして、イエス様は、トマスに言われます。

29：イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、  
幸いである。」

イエス様がトマスに語られたこの言葉は、トマスだけではありません、弟子たち全てに向  
かって語られた言葉だと私は思います。そして、この言葉は、今私たちに、この私に、イエ  
ス様が語っています。「見ないのに信じる人は、幸いである」と。

最後の2節です。

30：このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。

31：これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

以上が、本日私たちに与えられた聖書の御言葉です。

世にあって、自らが力なき者、無力な者であることを思い知った時、イエス様は私たちの最も近くにおいて、私たちに励まし、支えて下さいます。そして、私たちの祈りに応え、聖霊をもって私たちを導いて下さいます。

主から「あなたは私を信じるか」と問われた時、「主よ、信じます」と答え得る者となろうではありませんか。

祈りましょう。